
ヒトコトヒトココチ

兜のいず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒトコトヒトココチ

【Nコード】

N4055N

【作者名】

兜のいず

【あらすじ】

運の悪いことに一年間の休息を引き当て駿台に仮住まい中の男、に仮託して、

ふと口から洩れた言葉たちを残しておきます。

設定的には長く続かない方が望ましいジレンマをお楽しみください。
(ローマ数字で100はC、1000はMだそうです。80位から使えるのかな)

？ 浪人生と小説

完結した作品のひたすら終わりに向かう悲しさに耐えきれない

投げ出された物語の末尾で静止している登場人物を想像するのが何より辛い

あくまでもどこまでも哀しい読書体験

悶えるほどにいつか小説を書きたい、と。

思える逆説の悦びに身を沈めて焦がす他ない

手の届かない世界の切れ端を裏表紙に求めてもがく僕の手は、

幻惑で身を固めた天使かそれとも、

唯一確かな情熱を喰う虚構の悪魔か

掴んだ現実を離さない右手は左手と約束しよう

今年は俺だ。

? 夜明け云々

あかつきの

人の我が世の 果て先の

空々し闇を 一人ただ裂く

夜が明けた

冷えた空気は有無を言わせず口を通過し、

流れる生氣は紅く染まって四肢に渡る

朝の産声音速を越えて到り、

寝ぼけた世界を侵食する様はまるで闇のようだ

めくるめく日常に挟み込まれた夜という名の不連続面は、

闇でありながら癒しの調べ

光と闇が雑ざるヒトトキ。

朝ぼらけに霞む昨日を惑わせ、

寄る年波を欺き、

だからこそ新たな希望の闇を胸に抱き。

また光に満ちて今日を生きる

？ 夜明け云々（後書き）

冒頭に有名な和歌をパロってみました
著作権とか、大丈夫だよね……？

柿本人麻呂のすごさがよくわかる出来（笑）になりましたとさ

？ 風吹き

激しい風が時おり吹くよ

急ぐ人の熱い頬を撫でて諭し、

からかいながら、私に敵うものか、と。

髪を吹き上げ、振り返って再度。

正面から叩き付ける優しさは柔らかい温もりを残して今度こそ見えなくなる

初秋の薫りに焦る蝉がだんだんと数を少なくし、

積もる思いは口先で渦を巻いた

どこか口笛に似た音で、

風こそ私に敵うものか。

こうしてのんびりとした夏の終わりは、

一陣の風となって秋と繋がりゆく

風は去った。

静かな風が時おり吹くよ

? 飛び星

満天に映える星の幾つかは

もはや存在の叶わない光の最期の跡と言う。

時間にも満たない断末の栄華を乗せて、

いざやlight travels.

帰る先のない光は孤独に雄々しく、

振り返らず。

光よ逆行せよ。

存在から無存在へ

未来から過去へ

原点へ。

それでもやはり前を志向し、

どこまでもはやさを追求して、

前に何もいなくなるまで。

一体何を願うのか

流れ星となって、

一体何を願われるのか

流れてや

刹那に散るらむ 尾を引きの

燃ゆる死に花 咲く勿れとも

？ 棚から

手を伸ばし

届かなければ背伸びして

掴めてしまえばそれはボタモチ

ただ甘ったるい一過性の珍味

手を伸ばし

届かなければ背伸びして

足らなければジャンプして

取れてしまえばそれもボタモチ

汗の塩味で少し美味しい味はするけど。

手を伸ばし足らなければジャンプして寸足らなければ助走して、

掠めてこそ夢のような味がする

食べて背も伸び、

さらに上の棚を狙う、成長。

その繰り返しで。

空腹に耐えかね、下の棚に隠されたものに手を伸ばさぬことを。

？ 柵から（後書き）

書いてて今までと違う感じがしました、まる。

？ 空想世界のファンタジー

名前がなければわからないのか

僕の見る世界は。

感じる世界が表す世界になったとき。

僕の心は閉ざされてしまう

人知を越えて、

また、

知そのものを越えて、

ただある存在を目の前の仮定し、確定し

やっとな身体に行き渡る鼓動。

たとえば目の前のドアがドアでないなら。

日常を隔絶する扉が開かれ、

たとえば地球という存在がフィクションなら。

僕の心は動き出し、

たとえば何かがそんな僕を書いているとしたら。

『日常の中のファンタシー』

そんな名前は逆転し、

霧散する。

? **hello, ANOTHER**

誰かがばら蒔いた幸せの粒は

きつと根づいてナニかを咲かせる

思惑も及ばない太古の種は

全くの偶然を装って、

ある幸せの型を為した。

幸せの壺の中で弾けていくポップコーン

或いは高く、

或いは衝突して。

それはやがて必然の上の偶然となり、

確率未定で累乗される。

1／∞の兄弟は、

チを越えて何より近い『僕自身』

ここに僕がある

どこかに僕を思う『僕』がいる

この世界のどこか、

世界を越えた世界にいるものは。

ハロー、

「
「
「
「
「
「
「
「
「
「
——」。

？ 縄抜けのヒト

平和に裏打ちされた善意が可能にするもの

相手の事を思いやること

平和の裏に隠された悪意を悪意足らしめる。

貧富というやるせなさに隷属した先祖の祖先

狭義ではない自己中心の真ん中で、

あくまでも万年続く人間の発露に生き。

ニンゲンのあけぼのに何人が失われただろう。

慎まれた死ではなく、望まれた死を迎えた人間は億千万

ニンゲンは何を思ったか

以来、脈々と流れるタブーの血。

タブーがタブーであるためのタブー。

勝鬨の大きさは知らない。

人間としてのささやかな笑みを浮かべよう

？ マイ・ボーダー

一見無味な現行世界

乾燥を逃避して、世界を渡り合うこと幾度か

それは一つの物語

一人のたくさんの苦悩に溢れた偽りの世界

憧れた。

世界の欲する存在に。

ひっそりと佇む公衆電話に、

雑踏の下のマンホールに、

ベランダから見下ろす地上に、

どこかホントウの場所があると。

重ねた日々の中に、苛む頭痛としての異世界が僕を侵食して。

気づけば僕は渡り鳥

自然の摂理に従って僕を破壊して……

気づけば僕は失われていた。

帰る場所なき流浪のバケモノなりに、

安住を頼んで世界を求めた。

絶望の泥の中から砂金を拾い上げる外界

疲れはて、また渡ろうと。

力空しい身体に命じて息を吸い込んだ

さよなら世界。そして

こんにちは。

今度は真っ白な世界。

棄てるには綺麗すぎる居場所。

ダメだな、僕は汚いから。

――！

棄てるに渡れない、どこか懐かしい世界で咆哮する。

無味乾燥な現行世界

逃避して、世界を棄てること幾度か

それは一つの物語

一人のたくさんの苦悩に溢れたきつとどこかにある世界
憧れた。

世界の欲する存在に。

ひっそりと佇む木々に、

雑踏の下の大地に、

ベランダから見上げる天上に、

どこか本当の場所があると。

消えたはずの世界が、

色だけ失って目の前に展開する。

……違うか、

色を捨てたのは僕自身だ。

邪な嫌悪を拒絶する白、不釣り合いな存在は居なくなれ。

世界が汚れるのは僕が許さない。

また、渡る

渡れなかった。

世界があまりにも美しいから

それが自分と錯覚させる受容に、

救われた。

渡った世界は数多く、どの一つもいいとおしい。

渡って、渡ってきたこの現行世界は。

何よりも僕が欲し、

何よりも僕を欲している、

絶え間ない奇跡の顕現なのだと、列なつた世界が告げてくれる。

求めた世界は求めるに値しない

僕の境界は、世界と同義だから。

？ 零角度円運動

ただ目の前へと伸びゆく世界が今

進む度、蛇行して後ろは見えなくなる

だって僕らの真っ直ぐ、はどうしたって円だから。

歯車は自己完結に今を回して、

その結果ぶつ切りになったココロとカラダ。

身体を得る為にカラダを亡ぼすパドックスを脱却するには。

さあ世界をねじ曲げて。

仮初めに過ぎなくても

見えない義眼に覆われた瞳を、

香りに誤魔化された幻想のトリガーを、

音に掻き消された鼓動を、

食物にたぶらかされた無味の味を、

肉で塞がれた世界への接触を、

ひとつ余さず

存在しないようにねじ曲げて。

見つかったら『真っ直ぐ』にされてしまうから

XI 包括的なベクトルとしての地球史

平安年間四〇〇年

道長にとっての空海は、僕にとっての家康

地球史上の激動にあたる戦後五〇年

僕にとっての吉田茂は、義満にとっての尊氏だった。

云万年の昔昔

栄華を極めて絶対統治を為した恐竜

今、振り返られて思われる。

「絶滅した」と。

いま地球を席卷するのは未だ絶滅しない哺乳類だ

云億年の後に、古びた鉄骨の土地で、振り返るのは誰か？

地球史が、生まれるのはいつだ

それは二〇〇〇年ばかりの年表でしかない

口もあるかわからないそれはきっと大口を開けて笑うだろう

あるいは、同情するか。

ニンゲンの根本は恐竜なんだから、

XII 先行する遅れたハテナ

一足掛け行く度に、人はたぶん一歩分他人を置いていく

けれど一歩分の時間、成長の引き換えに時間は進まないものだ

一方通行のタイムトラベルに身を任せても、

今このときにも刻まれるデジタルは、

今このときにも止らないアナログは、

やはり飛ばす魂に比べては遅すぎる

感じる時間と流れる時間は一致しない。

喩えウラシマでも構わない

限界の中の一瞬の加速が追い抜くのは、

他人か、一寸前の自分か、時間か？

できればこんな次元を越えて、

十次元の幻に三次元として抗ってみたいくなる。

四本目の軸を、先ずは探しに目をつぶる、世界の裏にて。

XII I 世界の中の細胞大界を知らず

残念だなあ

人の視点しか持てないことが。

例えばヒトの細胞が宇宙として、

それが過ちとは言えないのが人間だ

僕等の存在する島宇宙

10の一24オーダーの数に意識を払えるのは人間だけかもしれない

でも

60億の「微生物」を観察して「化学」する未知の存在を仮定するのは果たして錯誤なのだろうか

逆説的に言えば、

僕等の細胞たちは文字通り人知れず、

広大な銀河を紅く流れているのかもしれない

なぜ病気をすると問えば、

その言の葉は細胞壁に阻まれて反射する

曰く「なぜ――するの？」

僕等にもし、

耳を越えた聴覚があるならば。

僕等を守りつつ、阻む、

オゾン層を抜けて

一切の時間が真なる漆黒を破って

囁きと評される神代の唸りを。

聴くことができるのに。

僕等を越えた世界の僕等よ、

いずれ消えゆく細胞たる我等に

一瞬でしかない永遠を賜え

XIIII 理想鏡

目は反射した光を捉えて目視する。

世界は無限の反射の賜物として色づいている。

月は太陽からの光を反射して眩く。

この世は全て反射のみで成り立つ鏡なのだと仮定した物語がある

反射と接触によって認識される主人公たち

光にして片道一秒の月への夢路

月に向かって眩かれた言葉は、

二秒後予測の本能が示すまま、

我々であるだろう我々へと降り注ぐのだ

パラボラアンテナの様に必然性ある反射に象られた物語が、

どうしたって必然的に偶発的な衝突と反射に、

負であれ正であれ、与えてしまう速度は

兎も角も偶然の反射は必然なのだと説き伏せる物語が。

何よりも世界を玉虫色に染め上げる僕の視線を反射する理想の写し
世なのだ

XV 地平線へ

ほら、ここにあるよ

見えないけれどあるものが。

ダークマターは見えないけれど存在する

質量を持って必死に存在を知らせてくれるのに。

僕らは悲しいかな、

剥がせないたった一枚のマジックミラーに邪魔をされるしかない。

気づかなくとも、

質量を持つ思いが、

思惑を持つ物質が、

いつだって僕らを支えるのに。

気づけないことに既に気がついてしまった僕らは

何を思えば良いのだろう

何を質量に変えて飛ばせば良いのだろう

きつと本来何も見えなかった瞳が、
こうして何かが見えない瞳になって、
きつとまた何も見えなくなるのだ。

すべての具現化された思念を見ることができるようになったとき、
見るしかできなくなったとき、

世界は実質無となって、

弾け、

やがて38万年の時を経て、
晴れ上がるのかもしれない。

XVI CON↓IN::VENTION

なんでだ

世界はなぜこうも青白い

そもそも世界に色があるのかすら疑わしい

それを論じることさえ馬鹿らしい

世界を例えば二分しよう

色がある世界と、

色がない世界とに。

ではそれ以外の世界は存在するか

この世界は少なくとも三次元だから、

ベン図の上の事象は役に立たない。

ベン図の裏に、色があるかもしれない世界が。

ベン図の表に、色がないかもしれない世界が。

すなわち、

地面に投げられた僕の影が、

天空に描かれた僕の視線が、

とりあえずの地球という事象と表裏を為すように。

すべては立体……否、

概観することすら叶わない、高次元存在で。

僕らの小さな手は所詮、三次元だから……否、

三次元としか捉えていないから。

どうしたら軸を得られるか？

目を瞑って、

手を握りしめて、

空気を吸い込んで、

耳を澄ませて、

世界の味を噛み締めて

そうしてやっと、見知るすべてが崇高には足りないことに至る。

だからいつも、

発明は斯くも難しい

XVII となり

自分が連続であること

二秒前の自分を自分と、

胸を張って言うことが、

虚勢ではない理由がどこにあるのか

古代の中国の蝶の如く、

いまの自分はすでに死に絶えた自分が見た夢であって、

世界の夢に内包される関数の下に生きる我々。

を否定するのは難しい

あるいはこうだ

この世界現象が、

複数の時間軸に縁取られる時空間にあるとして、

少なくとも十の次元を固定した偏微分において、

刻一刻と発散する世界の時間断面が「現在の世界」である

世界は断面であるから、

1単位前の世界とは連続だろう

つまり僕とは僕である。

しかしいかにも平面に過ぎないから、

接点こそ持て、

交わることはない

つまり僕とは完全な僕ではない

にもかかわらず僕を僕だと認識するのは、

意識までもが固定されているからである。

すなわち超世界はほぼ次元を無数に持ち、

そもそも次元の唯一性を超えているのかもしれない

世界の唯一性は、

超世界が極小か極大を持ち得れば、

タイムトラベルという名の世界の混在が起こることで否定される

同様に僕自身の唯一性も、

ひよつとすると、

二つ以上の唯一性であるかもしれず。

改めて世界の一様な多様性を疑わずにはいられない、

そんな僕は多様な一様体に違いない。

XVII 染まる、至高の無色

さあ闇に撒け

色のない焰を

落ちぶれゆく名残惜しい朱に変えるだけ。

たった一縷の相転換。

ちよんと爪先で弾いてみれば。

きつと何も鳴らない音がする

残り香は消えない。

目に映る瞬きは常に過去と未来を両睨む

少なくとも意識下に潜った燈は、

その残滓がこの永年の潰えるまで、

頭痛を伴って神隠れし、

何物でもない を苛むのを止めはしない

現行過程を踏み台にすると決めたときから、

すでにこの道は故郷となった

目の前に開けるは道のない陸。

言うなれば一面の世界は僕のもの

意気揚々と足を踏み出し、

そして気づくのだ。

この180°に僕は含まれていない

だって景色が変わるもの。

だって僕は視界の前に居ないもの。

だからきつと後ろには……

ふと、

身体に残る血脈とその匂い。

振り返れば誰もいないことはわかりきっているのに、

誰かがいるかもしれないことを否定することは叶わないから。

そこで反転する。

世界は今、真に僕のもの。

we cannot have too much tempta
tion in the world.

XIX ひとつ×∞＝ふたつ

毎日という区切りを強制的に与えられた身としては、

なぜ毎「日」なのかと思う

終わってしまう昨日

終わりがたくない今日

来てほしくない明日

何事も望み通りに行かないのなら、

ならば敢えて望まない

昨日とか今日とか明日なんて、

たった一文字の違い

たった一回の日出の違い

連続して移り行く時間に、

枷をつけてしまった償いとして為せるとすれば、

それは枷を外すこと。

すなわち、

時間を「動か」さない

時間を「止め」ない

？

世界で無数に蠢く針と共に、

細分化され、

個人へ集った一介の時間たち。

嵌められた針をひとつ、

動かす仕事は僕の生命を消費する

決して時間は消費しない

無定型に漂う存在は、

ただ命の媒介として、
僕の命を吸っている

答えは出た。

時間を解放する。

命を供給しないこと

すなわち。

吸われる命をなくすこと

すなわち。

命を失わずにいきること

逆転。

死んで命を失うこと

すなわち。

死んで時計を進めること

逆転。

時計を止めていきること

これから世界に対して僕は若返る

ひとつの時間分、

僕に与えられた、

全身全霊の時間。

果ては燃え尽きるか、

「永遠」に燃え続けるか。

それは永遠にわからない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4055n/>

ヒトコトヒトココチ

2011年10月4日21時58分発行